

R・L・ミーグ編訳

『チュルゴの歴史、社会学、経済学論集』

Ronald L. Meek, *Turgot on Progress, Sociology and Economics*, Cambridge, University Press, 1973, 185 pp.

* * *

P・D・グレンウェーゲン編訳

『チュルゴの経済学論集』

P. D. Groenewegen, *The Economics of A. R. J. Turgot*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1977, XXXVI, 193, [ii] pp., appendix.

Turgot が没して 200 年、その記念の年(1781-1981)が近づいている。われわれはさきに Adam Smith の *Wealth of Nations* の出版 200 年(1776-1976)を迎えただけである。世界の各地で多彩な記念の行事が催され、記念の出版が今もひき続いている。しかし、Smith といえば必ず関連して言及される Turgot については、そのような動きは今のところない。経済学の歴史の上に果たした 2 人の役割の大きさの違いを思えばそのこと自体は当然といえるが、同時に Turgot に対する単に伝説的に高すぎる評価と、その裏腹に十分に研究されないままの低すぎる評価とが漠然とそこに横たわっていて、Turgot 研究の進展を妨げているためとも思えるのである。

Turgot の正確な理解を妨げているものはなにか。当時の最高の知識人として、また意欲的な改革をめざす行政官としての Turgot のきわめて多面的な活動の、その全容が正確に把握されていないためである。Turgot の経済学は、Groenewegen もいうとおり、かれの全生涯の広範な知的対象のなかでは、中心的ではあるが、比較的小さな部分に属する。しかもこの比較的小さな経済学の領域をめぐる他の相対的に大きな部分、たとえば哲学、歴史、言語学、文芸、自然科学等との関連の理解が無視できなく重要なのである。それにかれの経済学の領域のなかでも圧倒的に多くの部分は地方知事 13 年、大蔵大臣 2 年の通算 15 年にわたる行政改革の文書によって占められているので、経済学著作のなかの理論的部分はさらに相対的に小さくなるのである。だから、Turgot の経済学の持つ深い含蓄は、本来時事的な、したがって時が経過すれば断片的とならざるをえない政策上の発言との密接な関連のもとでのみ正しく理解されるのであり、そのためには政策の背景にある行政上の微細な問題点の十分な把握が不可欠となるのである。また経済学以外の

分野、とりわけ歴史哲学と言語学との関連の理解があっではじめて、Turgot の経済学の歴史・社会学的枠組の特徴が明らかにされうるのである。以上のことは、ひとり Turgot に特有のことではないにしても、Turgot の思想の全容を理解するには不可欠のことからであるといわなければならない。

こうした Turgot に特有な事情を、著作集の最初の編集者 Dupont de Nemours はよく承知していた。かれは Quesnay の学説に対する狭い忠誠心から Turgot の経済学著作に多くの改変を加え、また Smith に対する異常な対抗心から Turgot の経済学説の先駆性を誇張して、これを二重に歪める誤りを犯したが、経済学以外の著作、ことに初期の著作にかんしては、当時ほとんど未刊の Turgot の手稿をよく保存し整理して、Turgot の思想の歴史・社会学的側面を知るために必要な資料を今日に伝える功績を果したのである。このことは Meek も上記の本の「序文」で指摘している。2 度目の著作集の編集者 Gustave Schelle は Dupont によって加えられた改竄を可能なかぎり訂正し、現在の学術的使用に耐える画期的な 5 巻本を刊行したが、その Schelle は資料を直接探索せずにバりに居ながら資料の送付を求めて編集したため、また折角寄せられた資料をときに「興味なし」として収録しなかったために、結果としては恣意的となり Turgot の思想の微妙な変化を知るのに重要な資料の脱漏を防ぎえなかった。Schelle 版著作集の重要さは今日も変わらないが、その高すぎる権威がかえって妨げとなって新しい資料の発掘を遅らせているのである。Schelle 版の出現以後はさすがに Turgot を無理に重農主義の枠内に止めたり、無用に Smith に対抗させたりする傾向はみられなくなったが、Turgot を経済学上の主著『富の形成と分配にかんする諸考察』でのみ語ろうとする傾向は続いているために、その分だけ Turgot を Quesnay や Smith のより大きな体系にひきつけすぎて考える場合が依然として多いのである。

ここに取りあげる 2 著はいずれもいささか旧刊に属するが、Turgot の記念の年を前にして Turgot 研究の現状を知るには有益であろう。両書とも表題でみる限り、なにか分析的な Turgot 研究を期待させるのだが、内容はそれぞれ Turgot の諸著作の英訳集である。ここに第 1 の特徴がある。Smith の影にかくされて比較的知られていない Turgot を直接その作品を通じて英語圏読者に触れさせようという意図である。Groenewegen は翻訳出版の事情を、1) 19・20 世紀の Turgot 研究がかれの自由放任論に偏りすぎていること、2) Turgot 研

究が主著『諸考察』に集中しすぎて他の経済学著作が無視されていること、3)なによりも Turgot の経済学著作がほとんど英訳されていないことをあげている。第2の特徴は、Meek が初期著作から『諸考察』まで、つまり Turgot の経済学をかれの初期の歴史・社会学的分析の発展線上で扱えようとするのに対して、Groenewegen は『諸考察』を中心に置いて、それ以前の経済学的習作とそれ以後の経済学の展開——具体的な経済諸問題への原理の適用——とを併せて文字どおり Turgot の経済学の全体を展覧しようとしていることである。両氏の適切な編集をとおして英語圏読者が飛躍的に多くの Turgot 著作に接しうようになったことはいうまでもないが、Turgot の思想の多面性を直接理解できるようになったことの意義は大きい。両書に収められている Turgot の著作の数と多様さからすれば、それらは現在入手しうる最新版のフランス語テキスト集より豊富である。また Meek の編集は、Roberto Finzi によるいっそう詳しい序文と文献案内とを伴って、そのままイタリア語訳に引き継がれているのである。

両著に収録されている著作はつぎのものである。Meek のものは、ソルボンヌでの閉講講演『人間精神の継続的進歩の哲学的展望』(1750年)、『普遍史にかんする2つの講演』(1751年ごろ)そして『富の形成と分配にかんする諸考察』(1766年)をふくむ。Groenewegen のものは、1)『紙幣にかんするアベ・シセあての手紙』(1749年)、2)『ジョサイア・チャイルドの翻訳ノートについての注解』(1753-54年)、3)『指定市場』(1757年)、4)『グルネ讚辞』(1759年)、5)『富の形成と分配にかんする諸考察』(1766年)、6)『課税割当て案』(1763年)、7)『サン・ペラヴィの覚書きについての所見』(1767年)、8)『グラスランの覚書きについての所見』(1767年)、9)『価値と貨幣』(1769年)、10)『利子つき貸付けにかんする覚書きの抜粋』(1770年)、11)『穀物取引にかんする手紙の抜粋』(1770年)、12)『鉄製品税にかんするアベ・テレあての手紙』(1773年)をふくむ。このほかそれぞれに巻頭に「序文」があり、Groenewegen のものには巻末に『諸考察』の各版の構成対照表¹⁾がつけられている。

Groenewegen の「序文」は、訳者自身がいうように、諸作品の詳しい解説を意図したものではないが、それぞれの作品につけられた脚注とともに、諸作品の成立事情や論点の特徴を知るには十分要を得たものである。訳者は1961-62年に同じ題名のマスター論文をシドニー大学に提出しており、またその主要部分と思われるいくつかの論文をすでに発表している。とくに“Turgot and

Adam Smith”は「スミス・チュルゴ神話」を扱っており、訳者の意図を知るのに有益である。一方 Meek の訳業の狙いも「序文」に詳しいが、その淵源は“Smith, Turgot and his four stages theory”にみられる。それによれば、かれは当時新発見だった Smith の「法学講義」の編集と Turgot の翻訳とを併行して行いながら、Smith の「商業的社会」に至る社会発展の四段階説の先駆が Turgot の初期著作のなかにあると着眼したのである。これが「序文」にも引き継がれて、読者に Turgot を読む新鮮な視点を提供しているのである。Meek はここでは Turgot の経済学の特徴である重農主義的生産の理論と迷いつつも近代的な資本の理論とが、かれの社会発展の四段階説ないしそれへの暗示をふくむ初期の歴史・社会学的分析のなかにも準備されているという。しかし Meek は Turgot への影響者としての Hume, Montesquieu, Cantillon との対比を語り、また Turgot の社会学的方法を Smith と Marx に先駆するものといひ、3人は共通して一種の唯物史観を有するというが、説得的といえるほどには十分な展開を持っていない。もともと翻訳書の「序文」に詳細な分析を期待するのは場ちがいであろう。この点にかんする Meek の十分な論証をもはや聞くことができないのは今さらに残念である。

両訳書の第3の特徴は翻訳のテキストが十分に検討されていることである。ことに Groenewegen は一部の著作については手稿資料を用いている。すでに述べたように、両訳書は『諸考察』をともに収めているが、双方とも翻訳台本に1788年版を用いていることは注目に値する。おそらく両訳者にとって1788年版をテキストに用いることはもっとも強調すべきメリットのひとつであろう。だがこれは偶然ではない。Meek は翻訳作業の過程で Groenewegen の助言を得ているし、1788年版をオリジナルにもっとも近いものと推断したのは、多分 Groenewegen であったらう。Meek はいちいちの訳語を慎重に吟味しているし、Groenewegen は各版のヴァリエントを詳細に示し、かつ訳語に全体として18世紀の用語を用いている。『諸考察』の英訳としては匿名の1793年版が有名で、この匿名の訳者はその用語法からみて Smith ではないかと推論した研究さえあるのだが、今世紀の訳者 Ashley の序文でも指摘されているように、1793年版はテキストに1788年版を用いているらしいが粗雑な版である。Ashley 自身は1788年版を用いず、Ephémérides 誌掲載のテキストと1770年版を用いた。Schelle は Dupont の改竄を訂正するために、Turgot が Dupont に要求して原稿どおり印

刷させた1770年版を用い、1788年版を1770年版のままの再刷と判断して、これを用いなかったために、これまで1788年版は正確にはその資料的重要性を吟味されずに今日に至ったのである。GroenewegenとMeekはSeligmanのコレクション(Columbia University)にある1770年版の正誤表を参照して1788年版が、おそらくは1770年版の後にもTurgotによって指示された訂正をふくむと考えて、これをテキストとして用いたのである。欲をいえば、他のテキストについても、この際手稿その他の18世紀のコピーによってDupont版・Schelle版のテキストの総点検を試みるべきだったと思う。

[津田内匠]